

『音楽的情動調整による保育技法の開発』 — 幼児期の子どもたちへの情動調律応用アプローチ —

Development of childcare techniques using musical emotional regulation

宇 治 和 子[※] 横 溝 聡 子[※]

Kazuko Uji

Toshiko Yokomizo

Controlling children's emotions is a difficult task in early childhood education. According to a survey of students seeking to become kindergarten teachers, young children are not yet able to control their emotions well, so they will quickly fight and cry even if they seem to be friends. Students reported trying to calm young children who did not listen, causing the students difficulties. Therefore, we used observational experiments to investigate whether children can learn to regulate their emotions through music instead of words. This experiment was carried out in a kindergarten, where original play and music were prepared. The music was simple, repeating the same phrases. Also, the play was easy but required patience and concentration. We compared the children playing with and without music to ascertain which condition facilitated better emotional control. Results indicated that children exhibited greater ease in controlling their emotions when music was playing. This suggests that musical emotional regulation is a viable technique for childcare.

I. はじめに

幼児教育を志す学生にとって、幼稚園や保育園、認定こども園等に在籍する子どもたちは、興味の対象であると同時に手強い相手でもある。手強い要因の一つと推測されるものに、彼らの感情は往々にして変動が激しく、笑っていたかと思うと突然泣いて駄々をこねる、仲良さそうにしているも次の瞬間に物の取り合いやケンカをはじめするなど、関わる大人たちの思い通りには決してならないことがある。このような問題に対し、本研究は、幼児教育を学ぶ学生へのアンケート調査から子どもとの関わりのどこに難しさを抱えているか整理し、彼らが保育実践において利用できそうな音楽的要素を取り入れた保育技法を試作、その効果を検証して、実施の可能性を探ることを目的にしている。

乳幼児の感情発達は、Bridges¹⁾によると、生後早い時期にお腹がすいた、オムツが気持ち悪い、といった要求を適切に対処してもらうことを通して、興奮や緊張の中から快／不快に代表

※幼児教育学科

されるような感情が分化しはじめることを起源とする。これらは子どもが成長するにつれて、更に細かく広がりをもった感情体系へと組織化されていくと考えられている。それ故Lewis^{2,3)}は、生後3年に出そろう子どもの内的な感情の出現はその後の人生においても存在し続けるとし、これらに注目することの必要性を説いている。

やがて子どもは、他の子どもが登場する保育の環境に入っていくのだが、そのような保育現場における他児との感情のぶつかり合いは、いつも思い通りにいく訳ではないため、状況次第で感情調整を行うことが求められるようになる。保育者は業務においてその手助けを積極的に行いながら、いつか子どもが自身で感情調整を行えるように導いていく。しかし子どもの言語の発達が追いついていない場合などは、泣いたり怒ったりしている理由が保育者には一向に理解できない、ということが生じる。入江⁴⁾によると、それは表情などを中心とした非言語的コミュニケーションを多用する低年齢の子どもほど顕著で、保育者のキャリアや柔軟性が問われるという。ベテランの保育者ならば、豊富な経験から泣いている原因がすみやかに推測できることも、新人の保育者には難しいため、「子どもが泣いたら、とりあえず抱っこする」などの感情調整支援に終始し、技法が単調でバリエーションに乏しくなるという問題がある。また樋口・藤崎⁵⁾らによると、実際の保育現場では、保育者の側から子どもの感情調整を行おうとあれこれ声掛けし気分が変わるように誘い掛けしている場面が圧倒的に多く見られ、当該子どもが行う調整は行われず、その結果本人は泣き止まないまま何かに参加しているといった事例も見られたという。集団での活動を指導している保育者の立場からすると、活動に子どもが復帰できたことは全体がまとまりよかったが、気持ちが崩れている状態を立て直せない子どもにとっては、心と身体の動きが一致せず、混乱が助長されないか一抹の不安が残る。子どもが自ら行う感情調整を育てるには、保育者側からの声掛けや誘い掛けといった言語による調整だけではフォローしきれない点も多いと推測する。したがって言葉以外の感情調整の技法も検討する必要がある。

これに関連し、子どもは養育者と、様々な音楽的律動(身振り・音声・表情など)を通して情動を共有しながら成長していくという指摘がある⁶⁾。確かに幼児を見ていると、特に機嫌が良い時など、リズムを取っているかのような踊っているかのような、身体の動きをしていることがある。スターン(1985)は^{7,8)}、人が自身の感情を、強さ、動き、輪郭、リズムといった音楽的表現で示すことを生気情動と名付けた。さらに彼は、乳幼児期の子どもと養育者が、このような情動に応答し合う方法として情動調律という概念を提唱した。これは子どもの発声や行為に含まれる情動的意味に沿った反応(言語的表現とは限らない)を養育者が示すことで気持ちの共有が図られ、また養育者自身の情動状態を発声や動作の強弱で示すことで子どもの情動状態をも調整することができる、という相互作用性がある。情動調律は前提として非言語の世界観(音声が使用される場合も含む)の中で起こるものであるため、それを保育に取り入れるにはか

なりの工夫が必要だ。一方で、生気情動には音楽的要素が含まれており、音楽との相性の良さを期待できる⁶⁾。そこで情動調律を応用し、子どもの感情に合わせて音楽を効果的に取り入れるアプローチ法を考案することにより、保育者が子どもたちの感情調整機能に働きかけることができないかと考えた。

以上から、幼児教育を学ぶ学生たちが実習などで子どもたちと関わる際に、彼らの感情調整についてどのような苦勞をしているか実態を把握し、その解決策となるような情動調律を応用した音楽的情動調整の保育技法を検討するため、本研究を行うことにした。

II. アンケート調査について

2023年6月、東北地方の短期大学幼児教育学科2年生80名(女子校のため全員女子)に対し、2週間の幼稚園実習が終了したタイミングで、自由記述アンケートに協力してもらった。

1. 方法と手続き

授業前の時間を利用して、手のひらサイズに切った紙(以下シートと略す)を用意して配り、「実習中、難しいなと感じたことを、箇条書きで思いつくまま自由に書いてください」という指示を行った。すると協力学生からは、「これは誰が見るのか」「何を書いてもいいのか」という質問が寄せられた。そこで「これは研究だけを目的として行うものなので、発表する場が限られており、また匿名化処理を行うため、エピソードをそのまま加工せず論文に載せることはしない。何を書いても大丈夫なので、忌憚のない意見を出してほしい」と付け加えた。協力学生からそれ以上の質問はなく、実施は10分ほどで終了した。大きめの封筒を用意し、その中に各自シートを入れてもらう形式で回収したが、特に混乱はなかった。

2. 倫理的配慮

倫理的配慮として、ヘルシンキ宣言に準じ、調査を実施する前に「幼児教育の現場で使える新しい保育技法を考案しようと考えている。それにあたりニーズを把握するため、実習に行った皆さんが実際にどんなことに困ったかを知りたい」という調査目的を、協力学生に丁寧に説明した。そして全体の結果は、後日共有する機会を設け、紀要等においてまとめられることも伝えた。またこの調査は匿名で任意に参加ができること、参加してもしなくても授業評価とは関係なく何ら不利益が生じることはないこと、何か問題が起こればいつでも対応すること、シートの返却は面倒でも協力学生自身の手で行い、返却されたことで上記に同意したとみなすこと、を合意した。

また論文発表をするに当たって、「郡山女子大学・郡山女子大学短期大学部における人を対象とする研究に関する倫理委員会」に審査を依頼し、承認を得た(課題番号2023-107)。

3. 結果と考察

得られた質的データは、Excel表に落とし込んで匿名化処理を行った。

a) データ整理と分析手続き

協力学生らが実習中に感じた困難について、自由回答された質的データは全80シートだった。多くの場合、1つのシートに複数の困難情報が書かれていたので、Excel表の整理においては1セル1種類の関連情報が記述されるようにし、シートごとのユニット化を行った。その結果、1シートにつき最小1から最大13のセルに分割され、全体としては240の質的データに整理することができた。

そのデータ群をうえの式質的分析法⁹⁾によって分析したところ、「特にない」等の無効データ(10)を除外し、下位カテゴリー30種(以下<>で内容を表示)が生成された。さらに意味においてまとめられた上位カテゴリー6種《やらなければいけない課題》《実習先との関係》《幼児を導くことの難しさ》《幼児らしさに翻弄される》《幼児同士のトラブル解決の難しさ》《子どもに障害がある》に分類できた。

それぞれがどんな文脈であったのか、以下、順に述べる。

b) 《やらなければいけない課題》

実習中、学生に課される《やらなければいけない課題(57)》は大きく2種類あった。一つは実習体験をまとめた日々の実習日誌、もう一つは実際の子どもに対し保育指導を行うための指導案作成である。これらを決められた期間内にこなしていくのはくとても大変(17)>で、学生たちは<睡眠不足(7)><体調不良(5)><その他の問題(5)>を抱えながら、<実習のプレッシャー(8)>や自身の<保育技術不足(8)>等の不安と闘いつつ、<準備や片付け(5)>に奔走していたことがわかった。

c) 《実習先との関係》

《実習先との関係(21)》についての困難は、小さなデータ群だった。<対人関係の難しさ(15)>として、挨拶しても返事を返してもらえないことや急な予定変更を言われて対応しきれなかった不満などが、遠慮がちに語られていた。あるいは<保育観の違い(6)>から、担当の保育者のやり方に疑問をもつこともあったようだ。

d) 《幼児を導くことの難しさ》

子どもとの実際の関わりにおける困難で一番大きなデータ群は、《幼児を導くことの難しさ(67)》であった。幼児期は発達の個人差が激しいため<活動ペースの違い(10)>が顕著で、<指示がうまく伝わらない(6)>や<することが理解できていない(2)>、面白いことに反応して<悪ノリ(4)>等をはじめめるなど、<全体としてまとめる(10)>ことが難しくなる。学生は、子どもを何とか落ち着かせようと、<子どもへの対応(6)>を考えたり<子どもの気持ちの読み取り(3)>に努めたりするが、やはり声掛けだけでは<場面の切り替え(16)>がうまくいかず、<集中力が続かない(4)>事態が発生したり、ゲームで負けたことが悔しくて延々と怒っているなど<くだめるのが大変(5)>だったりするようだ。またどこまで見守ってどこから関

わればいいか＜援助のタイミング(1)＞がわからず、保育経験の浅い学生にとって、幼児を導くことはかなり難しく感じているとわかった。

e) 《幼児らしさに翻弄される》

《幼児らしさに翻弄される(46)》のデータ群からは、学生が幼児ならではの行動に振り回されている状況が理解できた。例えば、＜異常にくっつかれて困る(12)＞＜妨害されて平等に関われない(6)＞＜泣かれる(5)＞＜説得に「嫌だ!」と拒否される(12)＞は、幼児にありがちな自分中心の感情表現である。だがそれを目の前で実行されてしまうと、学生はどうやって対応すればいいかわからなくなるようだ。また力加減がわからない幼児に突進され、おもちゃをぶつけられてケガをするなど、＜思わぬ攻撃(4)＞を受けることもあった。さらには担当保育者の言う事には従っても実習生の言う事はきかない、といった対応差をつけられ＜子どもに甘く見られる(7)＞こともあったようだ。

f) 《幼児同士のトラブル解決の難しさ》

幼児は頻繁にトラブル(＜物の取り合い(11)＞や＜子ども同士のケンカ(10)＞)を起こすので、学生はその状況にも逐一对応しなければならない。その中には、何度言っても行動の改善ができなくて＜嫌がられることをする(5)＞子どもがいて、《幼児同士のトラブル解決の難しさ(26)》を感じていた。

g) 《子どもに障害がある》

ここまでの上位5カテゴリーは、多少の言語理解が期待できる健常児の場合の困りごとであった。そこに最後の《子どもに障害がある(13)》が加わると、さらに手強さが倍増する。子どもに障害がある場合は、上位5カテゴリーすべての項目に渡って影響があり、健常児の時とは違うイレギュラーな事態が起り得るので、対応にバリエーションを効かせられない学生たちは右往左往してしまうようだ。

4. まとめ

アンケート調査結果を俯瞰すると、学生たちが実習中に感じていた困難には、実習日誌や指導案の作成、実習先との対人関係など実習そのものに付随する課題や問題もあったが、それよりも《幼児を導くことの難しさ》《幼児らしさに翻弄される》《幼児同士のトラブル解決の難しさ》にあるような、子どもと関わることについての難しさが多かった。さらにその内容は、幼児が自分からは感情調整を行うことが難しいために、勝手にはしゃいだり泣いたり怒ったりケンカしたりするのを保育者側が必死になだめようと試みるが上手くいかない、というものが多かった。学生は子どもたちに対して、声掛けという言語的コミュニケーション以外に使える方略をもっていないようなので、非言語での新しい保育技法を開発することには意味があるとうわかった。また幼児は、保育活動中、場面を選ばず気持ちが崩れる可能性があるとうわかったので、柔軟性があって応用がきく技法を検討することが大切だと考えた。

Ⅲ. 子どもたちへ情動調律応用アプローチの検証

上述のアンケート調査の分析を土台として、次は本題となる子どもたちへの情動調律応用アプローチを検証した。

1. 方法

2023年7月後半、東北地方の私立幼稚園にて、夏休み中のため預かり保育の子どもだけで人数が少なくなるタイミングを狙い、その日登園してきた年少児、年中児、年長児を一日1クラスずつ訪問した。

検証方法として用意したのは、10～15人程度の集団で行うことのできるオリジナルの遊び「ひまわりモンスターとジャンケンゲーム」だった。この遊びに含まれる要素は、子ども自身に馴染みがある方が良いので、順番に並んで待つ、ジャンケン、くぐり抜ける動きとした。オリジナルの遊びを考案した理由は、子どもが過去の情動経験から影響を受けることがなく、ルールの変更や追加を持ち込みやすく、観察しやすい場面設定が用意できることを考慮したからだ。そして音楽的情動調整として「ジャンケンの歌」を考案した。オリジナル曲にこだわった理由は、同じく子どもにとって過去の情動経験が呼び起こされる心配がなく、馴染みやすい旋律で遊びに誘いやすいこと、音の強弱やテンポの変化といった演奏のアレンジを行いやすいことからだった。この遊びと音楽を使って、音楽がない状態で遊ぶ時と音楽がある状態で遊ぶ時を見比べて、情動調律応用アプローチの効果を関与しながら観察することを計画した。さらに一連の活動をビデオ撮影し、遊びの中で子どもが自然にはしゃいだり興奮したり怒ったり小競り合いを始めたりする様子の動画記録も取ることにした。

2. 装置と手続き

装置：ひまわりモンスターとして、スチール製3段の脚立に、ひまわりの目玉を取り付けた段ボールを被せ、周囲を平テープで飾ったものを用意し、遊びの中心となる装置とした(写真1と2参照)。「ジャンケンの歌」は、ベースとなる旋律(譜例1)に、勝った時の気分を表す旋律(譜例2)と負けた時の気分を表す旋律(譜例3)を用意して、バリエーションをもたせた。

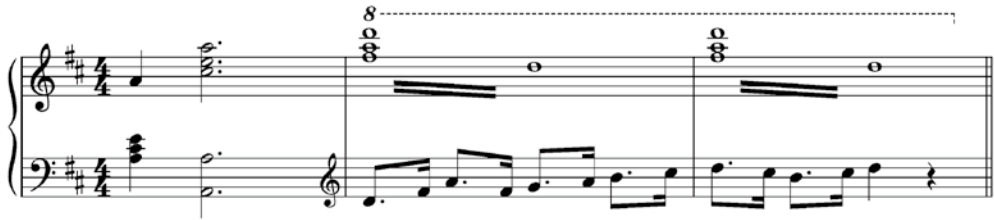


写真1と2 「ひまわりモンスター」

譜例1 「ジャンケンの歌」



譜例2 「勝った時の音楽」



譜例3 「負けた時の音楽」



手続き：遊びは、以下①～⑥の手順で行われた。詳しい場面設定についてはFigure 1で示す。

- ① 自発的に寄ってきた子どもたちに遊び方を説明し、ジャンケンの練習を兼ねて、「ジャンケンの歌」(譜例1)を皆で歌う。さらに「monsterの中で立たないこと(立つと頭をぶつけ、脚立が倒れて危ないから)」という注意事項を伝える。
- ② 最初は音楽なしでスタート。monster助手は、子どもがはしゃいだり騒いだりするのを言葉で注意することは極力控える。子どもは、40cm間隔に貼られた床の白テープに従い列を作って並び、ひまわりmonsterの前まで来たら、monster助手1とジャンケンをする。
- ③ ジャンケンに勝ったらmonsterの中をくぐることができる。
- ④ monsterをくぐったら、monster助手2の前の丸クッションに座る。
- ⑤ 丸クッションの子どもが3人になったら、monster助手の合図で3人ジャンケンをする。
- ⑥ 勝ったら列に戻って順番を待つことができる。(途中から音楽ありの遊びに移行)

注意：全体として30分を越えない遊びとする。

音楽なしから音楽ありの遊びに移行するタイミングは、ピアノ演奏者が判断する。

子どもがはしゃいだり騒いだりしたら音楽のリズムや強弱を変えて介入する。

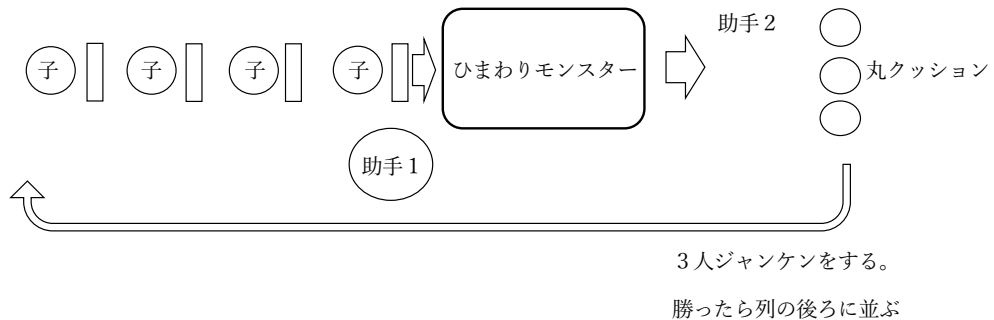


Figure 1. 「ひまわりモンスタースとジャンケンゲーム」の場面設定

3. 倫理的配慮

倫理的配慮として、ヘルシンキ宣言に準じ、調査を実施する前に研究目的や方法を当該幼稚園園長に説明し、同意を得た。そして子どもたちは自由意志で用意された遊びに参加し、やめることができた。また個人情報を園の先生などから聞き出すことはせず、遊び場面のみを撮影し、撮影した動画は研究目的以外には使用せず、USBに保存し適切に管理することにした。

また論文発表するに当たっては、「郡山女子大学・郡山女子大学短期大学部における人を対象とする研究に関する倫理委員会」に審査を依頼し、承認を得た(課題番号2023-107)。

4. 結果と考察

a) データ整理

本調査では、筆者2はピアノを演奏、筆者1はモンスタース助手1として遊びを運営、他にアルバイト学生が助手2として実験に参加した。得られたデータは2種類あり、関与しながらの観察によるメモとビデオ撮影による動画であった。前者の関与しながらの観察では、音楽がない時と比べある時の方が、実際の遊びの運営にまとまりやすさを感じていた。だが子ども一人ひとりの動きまではとても追いきれないので、目の前の子どもたちが遊びに集中できていれば(年長や年中)ゲームが成功したと感じ、反対に散漫な雰囲気が強ければ(特に年少)失敗したのではないかと不安になる傾向があった。

そこで後者のビデオ動画による記録を比べてみることにした。3種類データ(年少、年中、年長)を整理するため、分析枠組みとして、＜遊びがはじまる前＞＜音楽なしの遊び＞＜音楽ありの遊び＞＜遊びの終了後＞の4場面を設定した。そして筆者1と2が別々に動画を見ながら、各場面で気になった子どもの様子を細かく紙に書き出し、年齢と音楽のある／なしがどんな風に影響するのか比較分析した。詳細はTable 1に示す。

Table 1. ビデオ動画による子どもたちの様子

学年 (クラスに いた人数)	年少：動画27分 (14人)	年中：動画26分 (22人)	年長：動画30分 (17人)
ジャンケン 遊びに ついて	<ul style="list-style-type: none"> ・まだジャンケンが理解できていない子が多い ・テンポより遊びが進まない 	<ul style="list-style-type: none"> ・ジャンケンは理解できているが、同じものを出し続ける子が多い ・遊びはゆっくりながらもスムーズに進んだ 	<ul style="list-style-type: none"> ・ジャンケンは十分できる。次は何を出すか素早く考えられる子もいる ・子どもたち自身でテンポを取り始め、遊びがどんどん早くなる
遊びが 始まる 前	<ul style="list-style-type: none"> ・青虫のホーンを、助手1から奪って走り回る男児1がいる ・男児1は助手1に「返して」と言われ、助手2にホーンを渡す ・男児2が、助手2の手からホーンを取って、助手1に渡す ・それに納得しない男児1が大泣きする。ピアノで自身の泣き声を再現されるとびっくりして顔をあげ、また泣き出す。自分だけでは収まらず、助手2に抱きついて泣きはじめるが、比較的早く泣き止む ・9人ほどが近寄ってくる。とても距離が近いので、助手1が「少し下がって」と指示を出す 	<ul style="list-style-type: none"> ・大声を出している子が多数いる。理由はわからないが、文句を言って泣いている子もいる ・手足を振り回している女児1がいる。他の子が気が付いて、遊びに誘う ・男児1と先生が話している間を邪魔するように、男児2が通っていく ・「は?」「パカヤロー!」「この野郎!」と怒鳴っている男児の音が聞こえる ・助手1が準備していると、モンスターに興味をもった男児3が乱暴に触ろうとするので、「ダメダメ、壊れちゃう」といさめる ・12人ほどが近寄ってくるが、口々にしゃべっているのを何をしゃべっているのかわからなくなる 	<ul style="list-style-type: none"> ・お客さんが珍しくないようで、子どもたちは助手1に近寄ってこない ・自分の遊びをしながら、チラチラこちらを見ている子がいる ・「ダルマさんが転んだ」を7人ほどでやっている。節回しを覚えて工夫しながら楽しんでいる ・「(遊びに)まぜてー!」「いいよ」とやり取りしている ・「ダルマさんをやっている人はやってもらって、こっちで遊ぶ人は来てね」と声をかける ・10人(ダルマさんをやっていた子7人(気になってみている子3人)ほどが近寄ってきた
音楽なしの 遊び	<ul style="list-style-type: none"> ・ジャンケンの練習は、リズムにのれずタイミングよく手を出せない子が多数いる。手に持っているおもちゃを男児3が投げ捨てる。4回練習する ・段取りがわかっておらず、助手1に「まだですよ」「こっちはよ!」と何度も言われる子がいる。丸クッションでジャンケンせず、動こうとしない子が多い ・子どもたちは遊びに夢中になると順番抜かしをして、「ダメ!」「違う!」と小競り合いが起こる。助手1に注意される子もいる ・丸クッションの付近で小競り合いが始まり「痛い、痛い」ともめる ・男児4が長い棒を持ったまま参加し、前で待っている子をついたり床を叩いたりしている ・モンスターをくぐった後、遊びの輪から離脱していく男児5がいる ・モンスターに触りに来たり、丸クッションをパタパタさせたりする子が数人いる ・参加人数：8～10人 遊びの時間：7分 	<ul style="list-style-type: none"> ・ジャンケンの歌の練習は、列を乱さず落ち着いて出来ている。自分が出したものが何であったのか「見てー」と催促する男児4がいる ・モンスターをくぐってから、「やっぱまざんない!」と大声で主張する男児3がいた。数人がつられて一緒に動き始める ・説明は聞いてくれるが、少し注意散漫で理解に時間がかかる。同じことを何度も伝えた ・頭に手をやったリガッツポーズでビヨンビヨン飛んだり足踏みしたりしている女児が複数いる ・あちこちで「先生～」と叫んだり、うなり声のような大声を出したりするので、助手1も大きい声を出さないといけない ・うろうろと何となく別のことをして、遊びの輪から離脱していく子がいる ・子どもたちの順番を待つ列は、最初こそ整っていたが、すぐに崩れ出す。途中で遊びの輪から離脱していく子が出て、最後は5人ほどになる ・参加人数：10人 遊びの時間：3分45秒 	<ul style="list-style-type: none"> ・ジャンケンの歌の練習は、集団を崩すことなく落ち着いて出来ている。「パーもできるよー」とアピールする男児1がいる ・「(僕やんない!」「やんない!」「やっぱり僕やんせん!」と大声で主張する男児1がいたが、誰もつられて動かないので、すぐに本人も戻ってくる ・全員が、素早く段取りを理解し、積極的に遊びはじめる。集中すると全員がどんどんモンスターに近づく ・待って、ビヨンビヨン飛んでリズムを取っている子どもが数人いる ・なかなか勝てなくて次の行動をとれない女児1が出たが、子どもたち自身がそのことを楽しむ余裕がある ・自分たちで遊びを盛り上げ、助手1が指示を出すのを忘れていると催促する ・身体を揺らして口々に叫んでいる子どもが数名なので、それぞれが何をしゃべっているのかわからなくなる ・参加人数：11～12人 遊びの時間：9分
音楽ありの 遊び	<ul style="list-style-type: none"> ・ピアノが入ってくると、急いで参加しようとする女児1と男児6が現れる。2人とも順番抜かしをして、他児から指摘される。男児6が助手1から注意されて泣き声をかくが、順番をおくらずとも順着て待つことができる ・リズムに合わせて、揺れたり足踏みしたりジャンケンを出したりする子がいる ・女児1はリズムに合わせて手を出すのが苦手だが、少し練習すると慣れてくる ・助手1に順番抜かしを指摘された女児2が、少し離れたところからすねたように見えて、助手のすきを見てモンスターに触りに来る。触るのがしつこくなったので助手1が注意すると、また少し離れたところからすねたように見えている。その後、たから滑り落ちて転んだが、助手1が「大丈夫?」と声をかけると立ち上がり、舌を出してまた離れた行った ・男児4は何度も並んでいたが、手の棒を振り回したり持ち上げたりはほとんどしなかった。女児3は、淡々と何度も並んでは、モンスターをくぐる。ジャンケンに勝ったか負けたかは判断できないようだが、ピアノが負けた音になると、自分から後ろに並び直す ・参加していないが、手にしたおもちゃでリズムを取りつつ様子を見ている子がいる ・途中で遊びの輪から離脱していく子が出て、最後は5人ほどになる ・参加人数：9～10人 遊びの時間：8分30秒 	<ul style="list-style-type: none"> ・ピアノが入ってきていたことに、子どもたちはあまり気が付いていないようである ・ピアノが入ると参加する子が増えたが、騒がしく「先生!」と呼びかける声は継続している ・2分経った頃、ピアノ演奏者の横で、でたため弾きをする子が複数出てくる ・列に並びながら、ビヨンビヨン跳ねたり手やお尻を動かしたりしてリズムを取る子どもたちがいる ・「まざんない!」と言っていた男児3が、遊びの輪に近づいて来ても、何度も他児に邪魔を仕掛けている ・遊びの輪から出たり入ったりする子がいる。でたため弾きのピアノ音と張り合うように騒ぐ子がいる ・助手1に近い少人数は、ピアノ演奏者のピアノ音に合わせて身体を動かして、落ち着いて待っている ・座り込んだ男児5をどこかへ、執拗に頭や肩や背中を押して攻撃する男児6がいる。園の先生が止めるが入るが、男児6は攻撃をなかなかやめない ・でたため弾きの音が大きくなると、子どもたちの態度もままりがなくなり、乱暴になつたり遊びの輪からの離脱が増えたりする。段ボールを蹴っている子がいる ・参加していないが、身体を動かしてリズムを取りつつ様子を見ている子が複数いる ・減ったり増えたりしながら、最後は8人ほどになる ・参加人数：8～10人 遊びの時間：13分30秒 	<ul style="list-style-type: none"> ・小さい音からスタートした。それに気が付いてピアノの方を見ている女児1がいた ・子どもたち全員が、3人になったらジャンケンするというシチュエーションが気に入って、モンスターに近寄り、次の展開に集中している ・リズムに合わせて服裾を引っ張りあげたりビヨンビヨン飛んだりリガッツポーズをする子がいる ・助手2に相手をしてみらおうと、ジャンケンしたりおどけた顔をしたりする子が数人いる ・ひまわりモンスターの上に置いている青虫のホーンを、助手1の目を盗んで鳴らしに来る子が多数。うるさく鳴らすので少ししなめる ・ジャンケンの歌を取って待っている子らが複数いる ・順番が回ってきた子の横や後ろから、ジャンケンの手を出している子が複数いる ・列を崩さない程度に動き回り、近くの子とじゃれ合うが、トラブルなく待っている ・自分たちの早いリズムでジャンケンをはじめ、ピアノ演奏と合わなくなるようになる ・子ども同士のリガッツポーズはないが、少し飽きてきたように感じたのでルールを少し変える(3人ジャンケンで勝った人は反対からモンスターをくぐって戻ることができる) ・参加していないで自分の遊びをしているが、様子を見ている子が複数いる ・参加人数：10～12人 遊びの時間：14分30秒
遊びの 終 後	<ul style="list-style-type: none"> ・遊びが終了すると、脚立を融る子が数人いた。すぐにおもちゃの取り合いで泣き声が上がると、落ち着いた様子でジャンケンの歌ではない曲が鳴ると、全員が動きがゆっくりになりそれぞれの遊びを始める ・男児4は、手に持った棒を誰もいないところで振り回していた。男児3が身体を左右に投げ出すようにしながらふらふら歩いている。男児2が後ろから男児1を紙で叩く。男児6が箱を持ってきて、助手1のそばでカードを出して遊び始める。男児1が助手1に身体を寄せて座り、「ピアノが聞きたい」とささやいてくる。「うりゃ!うりゃ!」と何かを攻撃しているらしい声が聞こえる 	<ul style="list-style-type: none"> ・遊びが終了し、ジャンケンの歌ではない曲に変わっても、でたため弾きの音が聞こえている。プロレスごっこをするように床にゴロゴロしている男児が2人いる。子どもたちが勝手に動き、口々に声を出して騒然となる ・助手1の周りには、もうおしまい?と不満げに集まってきた複数の子どもたちがいた。青虫のホーンを顔に向けて鳴らして機嫌を取ると、嬉しそうに触って和やかな雰囲気になったが、そのホーンを奪って走り回る男児7が出現すると、それを追いかける子が出てきて、また騒がしくなった 	<ul style="list-style-type: none"> ・「これでおしまい、また来るね」と言うと、「明日来る?」「いつ来る?」と子どもたちが少し騒がしくなるが、ジャンケンの歌ではない曲にピアノの音が変わると、興奮がずっと静まる ・すぐにダルマさんが転んだの遊びを始めるグループと、助手1の近くに来て名残惜しそうにするグループに分かれた

b) 動画による比較分析

年少では、まだジャンケンが理解できていない子どもが多く、遊びがテンポよく進まなかった。＜遊びが始まる前＞、男児が助手1の押すと音が鳴る青虫のホーンを奪って逃げ回り、他児に取り上げられて大泣きし、かなり騒々しかった。＜音楽なしの遊び＞が始まると、10人ほどの子どもたちは遊びに参加しつつも、順番抜きを助手1に見つかって注意されたり、小競り合いが始まって誰かが「痛い、痛い」と言ったり、長い棒を持ったまま参加して前の子どもをつついたり床を叩いたり、丸クッションをバタバタさせたりと、落ち着いて自身の番を待っていることができない場面が多かった。しかし＜音楽ありの遊び＞が始まると、丸クッションに座り込んで動かなかった子どもたちが遊びに戻ってきたり、リズムに合わせて身体を揺すったり、棒を持っちはいるが振り回さなくなったり、転んでも泣かなかったりといった様子が見られるようになった。ピアノ演奏がやみ終了が告げられると＜遊びの終了後＞、子どもたちは自身のやりたい遊びをそれぞれに始めた。助手たちが片付けをしている時に、おもちゃの取り合いでケンカが始まり泣き出したり、気に入らない他のメンバーを紙で叩いたり、棒をまた振り回し始めたり、「うりゃ、うりゃ」と何かを攻撃したりしている子どもたちが出てきた。

年中はジャンケンが一応できる子どもが増えるので、比較的スムーズに遊びが進んだ。＜遊びが始まる前＞、準備をしている段階からモンスターに興味をもち触りにくる子どもが続出し、助手1が「ダメダメ、壊れちゃう」と注意し、セッティングに手間取ってしまった。泣いていたり、手足を振り回していたり、「バカヤロー」と怒鳴っていたりする子どもたちがいて、かなり騒がしかった。＜音楽なしの遊び＞が10人ほどで始めると、その中から「やっぱ、混ざんない」と他の子どもを扇動するように大声で叫ぶ男児が現れた。数人がそれにつられて、一緒に動き始めた。また一部の子どもがうなるような大声で話し始め、負けじと助手1の声も大きくなり、遊びから離脱していく子どもが増えて輪が崩れ始めた。＜音楽ありの遊び＞が始まると、ピアノ演奏者の横でたらめ弾きをする子どもが数人出てきてしまった。すると待っている間、助手1の近くで演奏者の音に合わせてピョンピョン跳ねてリズムを取る子どもがいる一方で、でたらめ弾きの耳障りなピアノの音に負けまいと声を張り上げて騒いだり、座り込んだ子どもをどかせたくて執拗に攻撃を仕掛けたり、段ボールを蹴ったりしている子どもたちがいたり、保育室が騒然となってしまった。＜遊びの終了後＞も、しばらくでたらめ弾きのピアノの音が聞こえている間は、騒がしさが持続した。助手1の周りに、「もう少しやろうよ」と集まってきた子どもがいたので、青虫のホーンを鳴らして機嫌を取ると、嬉しそうにみんなで触って和やかな雰囲気になった。しかし青虫のホーンを奪う子どもが現れたので、また騒がしくなってしまった。

年長では、ダルマさんが転んだ遊びが流行っており、それに参加している子どもが大勢いた。＜遊びが始まる前＞、準備をしている段階では寄ってこなかったが、「ダルマさんをやってる

人はやってもらって、こっちで遊ぶ人は来てね」と声をかけると、気になってこちらを見ていた3人程度に加えて、ダルマさんが転んだ遊びをやめた9人ほどの子どもたちが寄ってきた。＜音楽なしの遊び＞が始まると、「やっぱり、僕、やりません」と大声で主張する男児が現れたが、誰もつられて動かないので、すぐに本人も戻ってきた。子どもたちは素早く段取りを覚え、積極的に遊びはじめ、なかなかジャンケンに勝てなくて次の行動がとれないことを楽しむ余裕さえあった。待っている間、ピョンピョンと飛んでリズムを取っている子どもがいた。＜音楽ありの遊び＞が小さい音から始まると、それに気が付いてピアノの方を見ている子どもがいた。子どもたちは3人になったらジャンケンするというシチュエーションが気に入り、ますます遊びに集中し、全体として楽しい雰囲気になった。ひまわりモンスターの上に置いていた青虫のホーンを助手1の目を盗んで鳴らしにくる、ジャンケンの歌を歌って待っている、後ろでバク転を試みる、順番が回ってきた子の横からジャンケンの手を出しているなどしている子どもたちがいたが、全く子ども同士のトラブルは発生しなかった。そのうち子どもたち自身の早いリズムでジャンケンをはじめ、ピアノ演奏と合わなくなることもあった。＜遊びの終了後＞は、「今日はこれでおしまい。また来るね」と言うと、興奮がずっと静まって、一部の子どもたちはまたダルマさんが転んだ遊びに戻っていった。

c) まとめ

子どもたち自身の感情調整力という視点から考えると、年少や年中の子どもは、遊びに入る前と遊びが終わってからの様子において自発的な子ども間のトラブルが頻繁に起こっており、発達的にまだ自分で調整することが難しい年齢であることが示唆された。一方今回の観察で、年長の子どもは同場面での自発的トラブルは少なく、子どもたち自身の感情調整力が育っていることが推測できた。そして大人が遊びを提供するシチュエーションでは、3年代(年少・年中・年長)の子どもたちすべてにおいて、やってみようという挑戦心や積極性を示してくれるものの、言語による介入だけだと順番を待てなくなったり集中できなくなったりして、全体の遊びの輪が崩れやすくなっていた。ところが音楽が入ると、気が散ることが少なくなって遊びに集中し、さらに音楽に合わせて声を出したり身体を動かしたりすることで自発的に気持ちの調整もしているようで、子ども間で起こるトラブルが減る傾向にあった。ただし年中の子どもたちの観察から、音楽の中にでたらめ弾きのような不協和な音が混じると、その音に反応してしまったと思われる騒々しさやトラブルが起こることもあると理解できた。

以上の結果を踏まえ、音楽的情動調整による保育技法の検討と情動調律応用アプローチの可能性について考察する。

IV. 総合考察

1. 音楽的情動調整による保育技法の開発

学生たちのアンケート調査の結果を俯瞰すると、彼らは幼児を保育していくに当たって、ポジティブな感情は問題ないがネガティブな感情は一人であっても表出されると全体がまとまらなくなるので、集団が崩れる前に声掛けをして何とかなだめて事を収めたい、と感じていたとわかる。しかし情動調律応用アプローチの検証結果から明らかになったように、言語による正確なコミュニケーションがあまり期待できない年少や年中の子どもは、自身で情動を調整する力がまだ育っていないことが考えられた。また年長を合わせた幼児全体でも、言語だけに頼る保育には限界があり、待てなかったり集中できなくなったりする子どもが出てくると、集団として落ち着かなくなりまとまりを失いやすい傾向があった。

そこで本研究では、言語に替わる非言語の新しい保育技法として、音楽の可能性を探ることにした。もちろん幼児教育の中で音楽的活動は目新しいものではなく、すでに取り入れられている。だがこれまでの使い方は、歌を歌わせるにせよ、演奏させるにせよ、子どもに表現させる(リトミック¹⁰⁾)にせよ、積極的に子どもをその音楽的な活動にのせていくために使われている。言わば音楽は、子どもの感性を引き出し、より充実させるための装置として機能する。それに対し、本研究での音楽の位置づけは全く異なる。音楽的な活動へ誘導することが目的ではなく、遊んでいる子どもの感情に並走させつつそれらに影響を与えるものとして機能させることを目的にした。そのため使用した音楽は非常にシンプルで、ジャンケンの動きを説明する歌詞は付いていたが、子どもたちにそれを歌うことや覚えることをあえて求めなかった。さらにピアノ演奏者が目の前で展開している子どもの様々な感情をひろって、それをアドリブで音楽的に再現することを通して、子どもが自分自身の気持ちと向き合えるように促していくことを心がけた。

その結果、子どもの揺れ動く感情を音楽が下支えするような、これまでにない保育が展開できた。どの年代でも全体として楽しい雰囲気が生まれ、特に仲間がやっていることをじっと見ながら並んで待つというような忍耐が求められる場面で、大きな効果を発揮した。年少では、個々人が音楽に合わせて身体を揺らすなどして落ち着いて待てられるようになり、年長ではそれに加えて、何かをやっている仲間の気持ちに自然と寄り添い拍手したり喜んだり残念がったりしながら、自分の番でなくても遊びに積極的に気持ちを傾けていられる様子が見られた。さらにその効果は、直接遊びに参加せず違うことをしている子どもたちにも広がっており、さりげなく一緒にリズムを取ったり歌ったりといった場の共有があった。

以上から、音楽には、子どもの揺れ動く感情を自然な形でなだめ活動をまとめる力が高いことが理解できた。ただし使用する旋律は、年中でのでたらめ弾きによる騒々しいピアノの音がまとまりを壊してしまったように、簡単なものであってもきちんと効果が期待でき、子どもの

感情に寄り添えるすっきりとしたメロディーラインであることが望ましい。今回の方法をさらに実践的に洗練させる必要はあるが、本研究の一連の取り組みは、目的としていた音楽的情動調整という新たな保育技法の開発においての大きな一歩となったと考える。

2. 情動調律応用アプローチの可能性

情動調律とは、本来、幼児と養育者という人対人の関係において、リズムや強さといった音楽的表現によって表される気持ちを共有することで、子どもの情動状態を養育者が調整していくという、養育者側からの感情の調整方法である。本研究は、このような養育者の役割を保育者が奏でる音楽が担うことで、子ども一人だけに対応するのではなく集団に影響を与えることができるのではないかと考えた。

情動調律応用アプローチの検証において、集中の持続と音楽との相互作用性という点から考察する。ピアノ演奏による楽しそうな音楽の介入は、筆者2が実際に子どもの様子を見ながら行ったのだが、年少から年長まで、音楽なしの時は遊びを運営している筆者1とジャンケンをしている子ども以外、あまり楽しそうな様子が感じ取れなかった。子どもたちは早い段階で遊びそのものや待っていることに飽きてしまって、散漫な雰囲気を醸し出し、離脱者も出てしまっていた。介入のタイミングは前もって決めていた訳ではないが、これ以上は限界という筆者2の判断で行った。すると子どもたちが楽しそうな表情になって遊びに気持ちが入り、ジャンケンをのぞき込んだり勝った子どもに賞賛の拍手を送ったりするようになった。さらに音楽なしの時は参加していなかった子どもまで遊びに合流してくるなど、音楽ありの方が場の雰囲気が華やいだものになり、遊びへの集中時間が長くなることが観察された。

また音楽ありの遊びの時に、子どもたちは特に指示を出したわけでもないのに、遊びに参加する自分たちのさまざまな気持ちに並走していた音楽に合わせて、一緒に歌ったりジャンケンの手を出したり、揺れたり足踏みしたりピョンピョン飛び跳ねたり、手やお尻を動かしてリズムを取ったり、服の裾を引っ張り上げたりバク転をしたりと、思い思いに動いていた。ただしその動きはどれも意識的ではないようで、周囲の大人たちに向けてやっているのを見せようなどの意図はなく、時々思い出したようにその場で一人でやっている程度のさりげないものだった。もちろん子どもたちが頻繁にこのような反応を見せたからといって、すぐさま音楽との相互作用性が生じたと判断することはできない。だが音楽がある状況に影響を受けたことは確かであり且つこのような動きをしながら子どもたちは、音楽なしの遊びの時には難しかった、楽しそうに順番を待ったり遊びに集中したりができるようになっていた。

複数の子どもの向けられた音楽が、一人一人の子どもの情動にタイミングよく機能したというよりは、子どもらがそれぞれに揺れ動く自身の情動を整えるために音楽を利用した可能性が高い。子どもの側から、提供されていた楽しそうな音楽に自身の情動を沿わせて調整してい

たのだとしたら、自発的な情動調律が音楽によって促進されたと解釈できるだろう。これは情動調律そのものではないが、情動と相性が良い音楽的要素をうまく取り入れ、よく似たメカニズムで情動の調整を行うという意味で、情動調律応用アプローチと捉えることが可能である。アンケート調査の結果にもあったように、言葉をまだうまく使うことのできない幼児には、言語による保育者側からの気持ちの調整がうまくいかない時が必ずあるものだ。声掛けとは全く違う子どもの情動の調整方法として、音楽を使った情動調律応用アプローチが幼児教育の現場で発展していく余地は十分にある。

今後に向けて

本研究は、幼児教育学を専攻する学生のニーズを整理し、幼児期の子どもたちの感情を調整することの難しさに焦点を当てて、言語によらない音楽的情動調整という新しい保育技法を開発するため、音楽を使った情動調律応用アプローチについての可能性を実践的検証から探ったものである。その結果、このアプローチの応用可能性は高いことが明らかになったが、これを実際の保育現場に取り入れていくにはさらなる工夫と改善が必要である。例えば介入させる楽しそうな音楽は、BGMになってしまっただけでは意味がなく、その場の子どもたちの気持ちに沿った音であることが重要で、忙しい現場でどのように取り入れることができるか導入枠組みを検討しなければならない。あるいは情動調整を促しやすい音楽の開発が必要なのか、既存の子ども向けの音楽を使用することが可能なのかも明らかにしなければならない。

本稿の成果を踏まえ、今後も本研究テーマのすそ野を広げていきたい。

謝辞

本研究に協力してくれた、短期大学幼児教育学科の2学年の皆様、私立幼稚園の教職員の皆様、園児の皆さんに感謝します。

利益相反の有無について

本研究発表に関連して、開示すべき利益相反関係にある組織等はない。

文献

- 1) Bridges,K.M.B.,:Emotional development in Early Infancy, Child Development,Vol.3,pp.324-341,1932.
- 2) Lewis,M.,:The development of intentionality and the role of consciousness, Psychological Inquiry,Vol.1,pp.231-247,1990.
- 3) Lewis,M.,:The emergence of human emotions,The Guilford Press,pp.272-292,2016.
- 4) 入江慶太：新人保育士が感じる保育の難しさとは何かー3歳未満児クラスにおける検討ー，川崎医療短期大学紀要,33号,61-67頁,2013.

- 5) 樋口寿美・藤崎春代：Toddler期の子どもの集団保育活動参加への自己調整と保育者の関わりー情動調整に着目してー，昭和女子大学生活心理研究所紀要,16号,21-32頁,2014.
- 6) Juslin,P.N.& Sloboda,J.A.,(Edited):Music and Emotion:Theory and Research, Oxford University Press,2001. 大串健吾・星野悦子(監訳)：音楽と感情の心理学，誠信書房,95-123頁,2008.
- 7) Stern,D.N.,:The Interpersonal World of the Infant: A View from Psychoanalysis and Developmental Psychology. NY,Basic Books 1985. 小此木啓吾・丸田俊彦(監訳)，神庭靖子・神庭重信(訳)：幼児の対人世界ー理論編一，岩崎学術出版社,1989.
- 8) Stern,D.N.,:The Interpersonal World of the Infant: A View from Psychoanalysis and Developmental Psychology. NY,Basic Books 1985. 小此木啓吾・丸田俊彦(監訳)，神庭靖子・神庭重信(訳)：幼児の対人世界ー臨床編一，岩崎学術出版社,1991.
- 9) 上野千鶴子：情報生産者になる，筑摩書房,2018.
- 10) 神原雅之・伊藤仁美：保育ではじめてリトミック，チャイルド本社,207頁,2021.

